
緋弾のARIA ～時空を越えた絆～

YUZU先輩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜時空を越えた絆〜

【Nコード】

N9157Q

【作者名】

YUZU先輩

【あらすじ】

アリアたちはいつもと変わらない時間を過ごしていた…だが突然武偵高に60年前の零戦が姿を現す。彼らは何処から…どうやって現れたのか!?

初弾、過去からの来訪者へ前編へ（前書き）

【緋弾のアリア】のタイムパドックス物になります、文才が無く粗い所があるかもしれませんが、よろしく願います。

初弾、過去からの来訪者へ前編へ

——20XX年・日本・東京

…バリバリバリッ！！

朝の空を銃声が駆け抜けた。

ここは東京武偵高・強襲科射撃訓練場。
アサルト

そこで強襲科2年の神崎・H・アリアが射撃訓練をしていた。

「……ふう」

弾倉が空になり、アリアは一息つきつつ愛銃のガバメント2丁を太股のホルスターに納めた。

「…6時だわ、そろそろ戻らないとキンジが起きちゃうわ！」

そう言つてアリアは急いで訓練場を後にした。

——1942年・太平洋・サイパン諸島——

「…第八歩兵師団及び第三航空隊、出撃準備完了しました！」

「…うむ」

ここは太平洋戦争最中の南方・サイパン。

この時、既に日本軍の要であった海軍機動部隊をミッドウェー海戦で失い、日本はアメリカを筆頭とする連合軍によって劣勢を強い

れていた。

彼、神崎孝次中佐が指揮するサイパンの基地も連合軍の大部隊によって包囲されている。

「よし総員出撃せよ。何としてもこの基地を守り通すのだ!!」
「はっ!!」

この基地には40人の守備隊と10機の零戦と3機の一式陸上攻撃機が配備されていた。

「第八歩兵師団出撃！航空隊も順次出撃せよ!!」

出撃命令をつけ航空隊の零戦が離陸するため滑走を初めたその時――

カツ!!!!!!

彼らを突然謎の光が襲った。

「な、何だ！前が見えない!!」

零戦のパイロットは光によって視界が奪われ混乱していた。

そして光が収まり視界が晴れた途端眼前に巨大な建物が飛び込んできた。

「うわっ!!?」

パイロットは咄嗟に機体を停止して何とか激突は免れた。

「…あ、危なかった…」

安堵する彼の元に航空隊隊長の峰義政大尉が駆け寄った。

「大丈夫か！長光飛曹」

「な、なんとか」

「そうか…しかしここは一体何処だ……」

「な、なんなのよあいつら…」

寮に戻ろうとしていたエリアは突然現れた彼らに困惑していた。

「…ていうかあれは旧日本軍の零戦じゃない、それにあの服は旧日

本兵の軍服だし」

そう言いながら携帯を取り出してキンジに電話をかけた。

ブルルルル…ガチャ

「…何だ？」

アリアは小声で事態を説明した。

それを聴いたキンジは明らかに困惑していたが、すぐに向かうと言
って電話を切った。

「さて、一体どうなるのかしら…彼らの様子からして現代の人じゃ
なさそうね。となると一体どうやって…」

そんな時アリアはひとつの可能性に気付いた。「まさか……タイム
スリップ……？」

もはやそれしか思い付かなかった。「…おい！その貴様っ、何して
いる！！！」

「！？？」

考える事に集中していたアリアは背後に兵士が来ていたのに気付か
なかった。

「手を挙げて向こうへ進め！」

「（…ここは素直に従った方がいいわね）」

下手に抵抗すれば彼等を刺激してしまう…

そう読んだアリアは彼の言う通りに彼等の居る方へ向かった。

「神崎司令！怪しい者を発見し、武器を所持していたので取り上げ
連行しました！」

兵士の言葉に腰に軍刀を提げた男が近寄ってきた。

「…お前、名前と所属を言うのだ。」

一見穏やかに見えるが、ただならぬ気迫を漂わせていた。「…神崎・

H・アリア、東京武偵高・強襲科2年」

「東京…だと？」

アリアの言葉に神崎中佐は反応した。

「という事は、お前は日本人か？」

「……まあ、そうね」

アリアそう言っていると兵士達はうるたえた。

「……これは手荒な事をして失礼した。名乗るのが遅れたが……私は大日本帝国陸軍・サイパン諸島・ラバウル航空基地司令の神崎孝次中佐だ。」

「……！」

アリアは彼の名前に聞き覚えがあった。

「（嘘……アタシのパパの曾お祖父様の名前だわ……）」

「……神崎どの？どうなされた……？」

「あ、いえっ、何でもありません」

慌てたアリアはごまかすために話を変える事にした。

「それで、どうしてここに……？」

「……それが我らにも分からんのだ、つい先程までサイパンの基地にいた筈なのだが……謎の光に襲われて気付いたらここにいたのだ」

「謎の光……ですか」アリアは確信した。

彼等は過去からタイムスリップしてしまったのだ。

「……ところで聞きしたいのだが、今は昭和18年8月であるか？」

「いえ……今は平成2X年の8月で、それにここは日本の東京よ」

「……へいせい？……どうなっているのだ？」

神崎中佐は動揺した。

「……無理もない、自分たちのいた昭和18年ではなく遙か未来である平成の世界に飛ばされたのだから。」

？弾、過去からの来訪者ゝ中編ゝ（前書き）

いやはやタイムパドックス物は難しいですね（＜―＞）

とにかく、？弾、未来からの来訪者ゝ中編ゝ始まります。

？弾、過去からの来訪者／中編／

——その後、電話を受けて来たキンジも彼等を見て驚いていたが、アリアが事情を話したんとか落ち着いた。

「……つまり、あんた等は太平洋戦争中の昭和18年からこの時代にタイムスリップしてしまったわけだ」と

「…うむ…そういう事らしい…」

その時先程のパイロットが提案を出した。

「でしたら、ここはひとまず付近を偵察してみてはいかがでしょう
か？」

「ふむ…確かに、ここが本当に日本なのか確かめる必要があるな…
よし長光飛曹、直掩2機を連れて付近上空を偵察せよ！」

「はっ！」

命令を受けたパイロットは二人の同僚を連れ飛行準備に入った。

「…え…ちょ、ま……！？」

アリアとキンジは突然の事で止めることができなかった。

ぶうううううーん！！！！

彼等が乗った零戦3機が第二グラウンドから飛び立っていった。

「（……マズイわ、このままだと自衛隊に気付かれるわ…）」

「（下手したら戦闘になるぞ…）」

キンジたちはただ飛び立っていく零戦を見ている事しかできなかった。

——自衛隊・木更津基地——

「平井一佐、識別不明機が3機東京・台場上空に出現しました」

「なに…民間のセスナか何かじゃないのか？」

「いえ………こ、これは！？　ぜ、零戦です！！」

「なんだって！？」

「間違いありません…これは旧日本海軍の零式艦上戦闘機、それが3機です！！」

「…撮影された映像来ます！」

そこには確かに機体に日の丸の描かれた零戦が3機編隊で飛行していた。

「な…なんという事だ…夢を見ているようだ…」

「だが民間に被害が出てはいかん、F-18をスクランブル発進させろ！！」

そして、基地からF-18戦闘機2機がスクランブル発進した。

その頃、零戦隊は羽田空港上空に差し掛かっていた。

「…これが羽田飛行場なのか？　見たことのない機体ばかりだ…」

「小隊長、左9時の方角から何かが接近！」

「なんだ！」

彼がその方向を見ると、高度を下げながらこちらに向かってくるボeing747が見えた。

「…っ、全機回避！！」

零戦隊は急いで回避行動をとり、難を逃れた。

そして今の飛行機の機体に日の丸とJAPANというのがあるのを見て愕然とした。

「…JAPAN…AIRLINE…日本航空だと？ それに日の丸があるということは」

「…し、小隊長…」

「…私達は…別の時代に…来てしまったというのか…」

彼等はしばらく放心状態のまま空港上空を飛び続けていた。

？弾、過去からの来訪者、後編、（前書き）

なんか某映画に似てるような気がしますますが気のせいですw

という訳で、？弾、未来からの来訪者、後編、始まります。

？弾、過去からの来訪者、後編、

「―こちらスカーレット1、識別不明機を補足した！ 確かにあれは零戦だな…―」

「―スカーレット2こちら視認した…まさか実物をこの目で見ることになるとは―」

「―とにかく奴らを空港から引き離すぞ、私に続け！―」
「―了解―」

「…これは一刻も早く司令に伝えなくては！」

零戦隊の長光は直掩機を連れ帰還しようとしていたら、突然彼等の頭上を2機のF-18が通り抜けた。

「な、なんだ…！？」

「小隊長！ 10時の方角に識別不明機2機！！ 機体には…：：日の丸があります！！」

「…友軍機か？ しかしあのような形の機体は見たことがないぞ」

「小隊長、指示を！！」

「くっ…：：全機散開せよ！！」

彼の指示で各機散開を始め、航空自衛隊の戦闘機がそれを追う―

こうして前代未聞の旧日本海軍の零戦と航空自衛隊のF-18の空中戦が始まった。

バリバリバリッ！！！！

零戦の20mm機関砲が火を噴き、自衛隊機に襲い掛かる。

だがジェット機とプロペラ機では性能が違いすぎる、当然避けられてしまう。

「くそ、攻撃が全く当たらん！」

零戦はあつという間に空港から引き離されて、東京湾上空まで誘導されていた。

「ん？ 基地からの新たな司令が……」

「……！？ なんと……事だ……スカーレット2！！作戦変更だ、これより零戦を東京武偵高管轄下の人工浮島に誘導し着陸させる——」

「え……り、了解——」

回避行動をとっていた長光機に自衛隊機からの無線が入った。

「——こちら日本国・航空自衛隊・木更津基地航空隊所属、長光孝輔二等空尉だ。貴官らを着陸できる所へ誘導する——」

「——あ、ああ……感謝する、あと部下共々突然発砲して無礼なことをした——」

突然始まった空中戦は互いに被害もなく終わりを告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9157q/>

緋弾のARIA～時空を越えた絆～

2011年6月10日08時31分発行